

大阪市平野区

平野環濠都市遺跡発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所



中世の南北溝(南から)

大阪市平野区

平野環濠都市遺跡発掘調査報告

2012.3

財団法人 大阪市博物館協会
大阪文化財研究所

序 文

本書は2010年に行った平野環濠都市遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。

調査では、中世の大規模な溝とともに、豊臣期から徳川期初めまで何度も掘り返された環濠を発見し、平野郷の成立に関わる重要な知見を得ることができた。資料の制約から、詳細な時期を絞り込めない状況にもどかしさを残すところもあるが、今後の調査・研究の進展によって、より深い理解が進むことを期待したい。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、多大なご理解とご協力を賜った大阪市教育委員会をはじめとする関係各位に、心より御礼を申し上げる。

2012年3月

財団法人大阪市博物館協会
大阪文化財研究所
所 長 長 山 雅 一

例 言

- 一、本書は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所が、2010年8月26日～10月5日に大阪市平野区平野市町3丁目40番1・7～9（もと平野青少年会館用地）で実施した発掘調査（HN10-1次、IINは平野環濠都市遺跡を示す）の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市教育委員会の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市博物館協会 大阪文化財研究所次長 南秀雄の指揮のもと、主として長原調査事務所副所長（現難波宮調査事務所副所長）岡村勝行が担当した。調査の期間・面積は第1章に記す。
- 一、本書の執筆・編集は、南、難波宮調査事務所長 高橋工の指揮のもと、岡村が行い、学芸員小田木富慈美がこれを補佐した。本書の用字用語や体裁などの調整は、高橋、東淀川調査事務所長 佐藤 隆、事業企画課長代理 清水和明、学芸員 小倉徹也の報告書校正委員が行った。
- 一、遺構写真は、岡村が撮影した。遺物写真の撮影は、寿福写真 寿福 滋氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料はすべて当研究所が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた層序学・堆積学的用語の中で、遺跡に係る特殊な用語については[文化庁文化財部記念物課編2010]に準じる。
2. 本書における地層名は第○層と表記する。また、各遺構埋土の地層名は「第」とって○層とのみ表記し、調査地の地層名と区別する。
3. 遺構名の表記は、溝(SD)、井戸(SE)、土壌(SK)、柱穴・小穴(SP)、自然流路(NR)の分類記号の後に、番号を付している。番号は古代～中世後期の遺構に301～399、中世末～近世初頭の遺構に201～299、近世後期以降の遺構に101～199を付けた。
4. 出土遺物には1からの通し番号を付している。
5. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文中では「TP+○m」と省略した。また、座標値は測地成果2000に基づく。国中の方位は図1が真北を基準に、それ以外は座標北を基準にしている。
6. 本書で用いた地層の土色は[標準土色帖][小山正忠・竹原秀雄1970]に拠った。
7. 本書で用いた土器編年と器種名については、中世の土器については、[中世土器研究会編1995]、豊臣期の青花・国産陶器は[森穀1992]に従い、煩雑を避けるため本文中では引用を割愛した。なお、本書で用いる豊臣期(豊臣氏大坂城期)とは本願寺焼亡(1580年)から大坂城夏ノ陣(1615年)まで、徳川期とはそれ以降の江戸時代を指す。
8. 引用文献は巻末に示した。引用文献は本文中に[筆者または編集発行者 発行年]のかたちで表示するので巻末で検索されたい。また、本文中で引用文献を表記する際、大阪文化財研究所→大文研、大阪市文化財協会→大文協、大阪市教育委員会→大市教と省略した。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 遺跡の歴史的環境と調査の経緯と経過	1
1) 遺跡の概要と過去の調査	1
2) 調査に至る経緯と経過	3
3) 報告書作成の経過	4
第Ⅱ章 調査の結果	5
第1節 居序	5
第2節 遺構と遺物	7
1) 古代末～中世後期の遺構と遺物	7
2) 中世末～近世初頭の遺構と遺物	9
3) 近世後期以降の遺構と遺物	12
第Ⅲ章 まとめ	15
1) 中世の溝について	15
2) 環濠について	15
引用・参考文献	16

英文目次

報告書抄録

図 版 目 次

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| 1 調査地近景および古代末～中世後期の遺構 | 3 中世末～近世初頭の遺構 |
| 上：調査地近景(南東から) | 上：SD202～205断面(南から) |
| 中：南壁断面(北東から) | 中：SD201検出状況(南から) |
| 下：NR301・SD302・303検出状況(北から) | 下：第5層上面の状況(東から) |
| 2 古代末～近世初頭の遺構 | 4 近世後期以降の遺構 |
| 上：SD302・303検出状況(南から) | 上：SD101～103検出状況(北東から) |
| 中：SD302b層下面検出動溝(北から) | 下：第3層上面の状況(東から) |
| 下：SK206検出状況(南から) | 5 出土遺物(1) |
| | 6 出土遺物(2) |

挿 図 目 次

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 図1 平野環濠都市遺跡の位置……………1 | 図6 SD302～304平面図……………8 |
| 図2 周辺の調査地……………2 | 図7 SD302・304出土遺物実測図……………9 |
| 図3 調査区配置図……………3 | 図8 中世末～近世初頭の溝の変遷……………10 |
| 図4 南壁地層断面図……………6 | 図9 中世末～近世初頭の出土遺物実測図……………11 |
| 図5 NR301(第6層)出土遺物実測図……………7 | 図10 近世後期以降の遺構の変遷……………13 |

表 目 次

- | |
|--------------|
| 表1 順序表……………5 |
|--------------|

写 真 目 次

- | |
|----------------|
| 写真1 作業風景……………3 |
|----------------|

第I章 遺跡の歴史的環境と調査の経緯と経過

1) 遺跡の概要と過去の調査

今回の調査地は、平野環濠都市遺跡の東端、国道25号線が平野川左岸を越えたすぐ北側に位置し、1763(宝暦13)年に描かれた『摂州平野大絵図』によれば、久宝寺八尾街道が平野に入る市ノ口北方の約30mに当る(図1・2)。

平野環濠都市遺跡は、平野川左岸の自然堤防上に立地する。この地は平野川の水運に加え、奈良街道・八尾街道・中高野街道など諸街道が交差する交通の要衝にあり、北東に接する正覚寺地域とともに、有史以前から地域の中核的な存在であった。1976年に大阪市教育委員会によって、杭全社境内で行われた最初の発掘調査から、これまで約30件の調査が実施され、大坂ノ陣の前後を中心に、弥生～江戸時代の変遷が徐々に明らかになりつつある[大文協2009]。

これまで確認されている最古の人間活動は弥生時代に遡る。遺跡西端のHN86～22次調査では、弥生時代の遺構面とともに、後期の広口壺が出土した[大文協2009]。北部では旧大日本紡績会社平野工場敷地内(平野宮町)で出土した弥生式土器[大阪都市協会1983]や、平野川右岸では江戸時代(明和年間)に出土した扁平紐式銅鐸(弥生時代中期後葉)[前田豊那1992・大庭重信2005]があり、弥生時代の集落が自然堤防上に広く広がっているものと考えられる。

坂上田村麻呂の子孫による開発の地という伝承がある平野は、平安時代後期以後は藤原氏の荘園となり、杭全庄あるいは平野庄と呼ばれる。実際、平野市町で行われたHN84～15次調査などでは、9～10世紀の遺構・遺物が見つかっており、この地の開発の画期が想定される[大文協2009]。また、平安時代後期から鎌倉時代の集



図1 平野環濠都市遺跡の位置

落については、平野郷の中心、樋尻門筋と残在橋が交差する北東角のHN85-23・95-1次調査で、座標北に対し、西に約11°振る13世紀代の溝と道路と考えられる遺構が検出されている[大文協1985・2009]。その後も同じ位置に溝が連続して掘られており、長期にわたって町割の基準となるラインがこの段階に存在したことを予想させる。HN96-16次調査で発見された井戸は土師器羽釜と曲物を組み合わせたもので、羽釜の年代は13世紀後半から14世紀前半である[大文協1999]。このように同遺跡では中世以前の資料も徐々に蓄積されているものの、小規模な調査が一般的であり、古い地層に到達できないことが多く、集落全体の状況はまだ明確でない。

戦国時代には堺と並ぶ自治都市としてその名を知られるようになるが、織田信長が畿内に進出するとその支配下に組み込まれ、さらに豊臣秀吉による大坂城築城の際には平野町人の大坂移住が強制されるなど、自治都市としての栄光は次第に失われていった。1615(慶長20)年の大坂夏ノ陣で町は壊滅的な被害を受け、翌年の1616(元和2)年に、末吉氏による復興が始まる。かつては現在の町割はこの復興時に施行されたものと考えられていたが、HN84-15・85-23・95-1・96-16次調査などによって、夏ノ陣の焼土で覆われる遺構面はすでに『摂州平野大絵図』に描かれた町割と一致し、既に16世紀

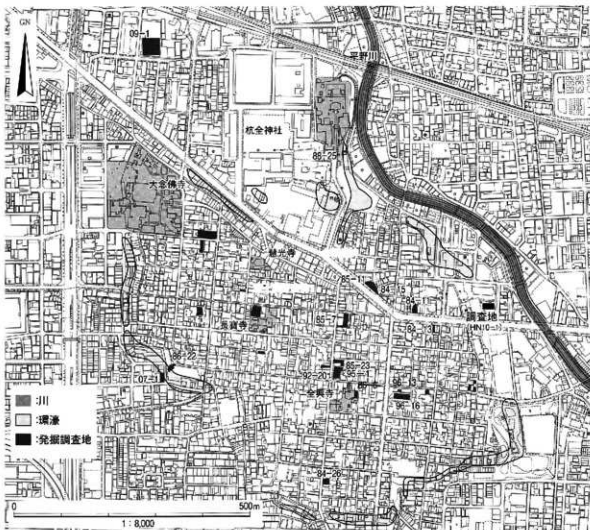


図2 周辺の調査地

には現在の町割へと変更されたことが判明した。その時期は遺構の分析から16世紀中葉を中心とした時期が指摘されている[豆谷浩之1999]。

今回の調査のポイントでもあるが、地割の変化とともに環濠の成立時期も、同遺跡の大きな問題点である。堀の存在は『兼見卿記』1583(天正11)年9月1日条にみえる環濠が埋められた記述から、16世紀後半には存在したことは間違いない。この環濠が1763(宝暦13)年の『摂州平野大絵図』に描かれた環濠と同じかどうかは現状で

は確認できないが、環濠内の町割が環濠外の地割と異なり、北に対して東に振る方向をもつことから、この町割が環濠の掘削に先行して存在したとは考えにくく、環濠の掘削が町割の施行と同時に行われたか、町割施行に先行したものと考えられ、16世紀中頃から後半の時期に環濠が成立したことが予想される[森毅2005]。



写真1 作業風景

2) 調査に至る経緯と経過

大阪市平野区平野市町三丁目に所在する、もと平野青少年会館敷地の埋蔵文化財の遺存状況を確認するため、大阪市教育局の委託により、大阪文化財研究所が2010(平成22)年2月24・25日に3箇所の試掘調査(HN09-3次調査)を行った[大文協2010] (図3)。その結果、いずれの試掘箇所にも

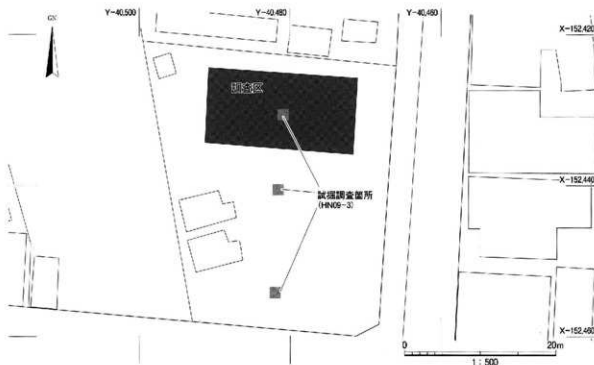


図3 調査区配置図

においても現地表面下約1.5mで近世中頃の生活面、約2.2mで環濠内の機能時の堆積層と考えられるシルト層、さらに約3.0m以深では自然流路による砂層が確認された。この試掘調査結果に基づき、平野環濠都市の環濠の実態、都市開発の変遷を明らかにするために、長さ20m、幅10m、200㎡の範囲で発掘調査が実施されることとなった。

調査は残土置き場を確保し、敷地北側で行った(図3)。2010(平成22)年8月26日より調査を開始し、搬入路の整備、調査区の設定の後、重機掘削を試掘調査の所見をもとに、地表下約1.3mまでの近現代盛土層および近世作土層までを対象に、30日まで行った。その後は人力によって地層毎に掘削を進め、近世の生活面、環濠、中世の自然流路など遺構の検出、記録を進め、10月1日に調査作業を終了した。同日、埋戻しを始め、10月5日に現場作業を完了した。

3) 報告書作成の経過

調査終了後は、出土した遺物および現地で作成した図面・写真を大阪文化財研究所難波宮調査事務所に搬入し、整理作業を行った。遺物については洗浄・注記・接合作業の後、必要な遺物の実測および写真撮影を行った。

報告書の編集は、調査時の平面・断面図および遺物実測図をパーソナルコンピュータを用いてデジタルトレースし、調査時の写真および遺物写真のスキャニングデータと合わせてページレイアウトソフトによって割付けしたデータをもとに、印刷・製本作業を外部委託して報告書を完成させた。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

調査区の現地表面の標高はTP+6.6mで、ほぼ平坦である。調査では、部分的な深掘りを含めて、現地表下3.8m (TP+2.8m)までの地層を観察した。後述するように、調査区全体にわたり、南北方向の溝や落込みが重複して検出され、調査区内で比較的広く分布する地層は以下の6層のみであった。各層の岩相の特徴は次の通りである(図4、表1、図版1)。

第1層：近現代の盛土層および攪乱層で、層厚は130cmである。

第2層：シルト偽礫を多く含む暗褐色(10YR3/4)粗粒砂を主体とする整地層で、層厚は約10cmである。

第3層：炭・焼土を多く含む褐色(10YR4/4)粗粒砂を主体とする整地層で、層厚は10cmである。18世紀後半の陶磁器片のほか鉄滓を含む。調査区中央より西側の上面では、SD101～103を検出した。

第4層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)粗粒砂を主体とする整地層で、層厚は10cmである。18世紀後半の陶磁器片を含む。

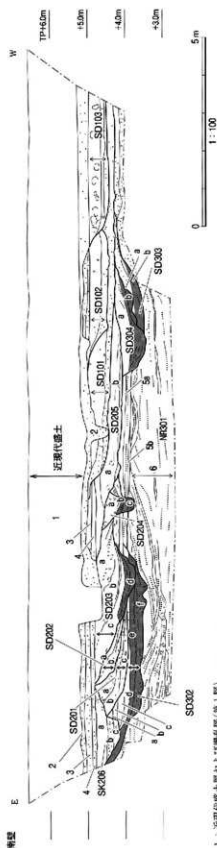
第5層：2層に分かれる。第5a層は灰オリーブ色(10YR4/5)シルトからなる水成層で、層厚は10～15cmである。遺物は確認できなかった。第5b層は灰オリーブ色(5Y5/2)粗粒砂質シルトを主体とする水成層で、層厚は10～15cmである。瓦器・東播系須恵器など13世紀代の遺物を含む。

第6層：にぶい黄色(2.5Y6/3)細粒砂～細礫からなるNR301を充填する砂層で、層厚は120cm以上である。土師器・須恵器・瓦器・東播系須恵器など、飛鳥時代～中世までの遺物を多く含む。もっとも新しい遺物は12世紀後半～13世紀前半に位置づけられる瓦器碗である。

表1 層序表

層序	主たる岩相	層厚 (cm)	地層の特徴	おもな遺物	おもな遺物	時代
第1層	近現代盛土層および攪乱層	130				近現代
第2層	シルト偽礫混り暗褐色 (10YR3/4) 粗粒砂	10	整地層	→SD101・102・103	肥前・瀬戸磁器	近世末
第3層	炭・焼土混り褐色 (10YR4/4) 粗粒砂	10	整地層		肥前磁器・瓦	18世紀後半
第4層	オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂	10	整地層	→SD302・303	肥前磁器・瓦	18世紀後半
第5層	a 灰オリーブ色 (10YR4/5) シルト	10～15	水成層		土師器・須恵器・瓦器	中世
	b 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗粒砂質シルト	10～15	水成層		土師器・須恵器・瓦器	中世
第6層	にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗粒砂～細礫	120以上	水成層		土師器・須恵器・瓦器	中世

凡例 → 上面検出遺構



- 1 : 近現代堆土層および礫点層 (第1層)
 2 : シルト海積混り層褐色 (10YR3/4) 堆積砂 (第2層)
 3 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/4) 堆積砂 (第3層)
 4 : オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粗粒砂 (第4層)
 5 : 灰-泥土層褐色 (10YR3/5) シルト (第5層)
 6 : 灰-泥土層褐色 (10YR3/5) 堆積砂 (第6層)
 7 : 灰-泥土層褐色 (10YR3/5) 堆積砂 (第7層)

- SD201
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR3/4) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/4) 堆積砂質シルト
 c 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR3/4) 堆積砂質シルト

- SD202
 a 層 : オリーブ褐色 (5Y3/2) 堆積砂
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (2.5Y3/2) 堆積砂質シルト

- SD203
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (2.5Y3/3) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (2.5Y3/3) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 c 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト
 d 層 : オリーブ褐色 (10Y3/4) 堆積砂質シルト

- SD204
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (2.5Y4/2) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (2.5Y3/2) 堆積砂質シルト
 c 層 : オリーブ褐色 (10Y3/4) シルト

- SD205
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (5Y3/2) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト

- SK206
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂混り粗粒砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR5/1) 粗粒砂
 c 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR5/1) シルト

- SD302
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト
 c 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト
 d 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト
 e 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂
 f 層 : 灰-泥土層褐色 (10YR4/3) 堆積砂質シルト

- SD303
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (5Y5/1) シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (5Y4/1) 堆積砂混り粗粒砂質シルト

- SD304
 a 層 : 灰-泥土層褐色 (5Y5/1) シルト
 b 層 : 灰-泥土層褐色 (5Y5/1) 堆積砂質シルト

図4 南端地層断面図

第2節 遺構と遺物

1) 古代末～中世後期の遺構と遺物

自然流路NR301、調査区を南北に貫く溝SD302～304がある(図5・6、図版1・2・5)。

NR301(図4) 調査区全体で確認され、第6層を埋上とする幅20m以上の自然流路であり、流れの方向は、ほぼ南から北である。堆積状況から中心軸は調査区東部にあり、深さ2.5m以上である。埋土からは土師器・須恵器・瓦器碗・瓦など、飛鳥時代から中世にかけての遺物が多数出土した。

出土遺物は埋没年代に関連するものを中心に図示した(図5、図版5)。1～7は土師器皿である。1～3は「て」字状口縁をもつ小皿で、口径はそれぞれ8.5cm、9.1cm、9.9cmである。内外面ともヨコナデで仕上げる。4は口径13.4cm、高さ2.6cm、5は口径15.1cm、高さ2.4cm、7は大皿で口径15.8cm、高さ2.9cmである。8は土師器羽釜で、口径30.0cmである。9～11は瓦器碗である。9は大和型瓦器碗で、口径14.9cmである。内外面とも密なヘラミガキで調整する。10は和泉型瓦器碗で、口径15.2cm、高さ5.2cmである。内面は底部内面に斜格子状の暗文を描き、疎らなヘラミガキで調整する。外面は上半部をヨコナデで調整し、下半部は指頭圧痕が顕著である。11は和泉型瓦器碗で、口径14.7cm、高さ4.1cmである。高台は低い。内面は底部に平行線状の暗文を描き、中位はヘラミガキ、口縁部はヨコナデである。外面は中位に雑なヘラミガキで調整し、下半部は指頭圧痕が顕著である。これらの遺物は、1～7・9が概ね11～12世紀前半、10は12世紀代、11は12世紀後半～13世紀前半に位置づけられ、NR301の時期は、古代末～中世初頭と考えられる。

SD302(図6、図版1・2) 調査区東部で検出された南北方向の溝で、現状で幅8.5m、深さ1.3mである。立ち上がりから復元すると、幅10m弱、深さ2m弱の規模となる。斜面は2段に落ち、1段

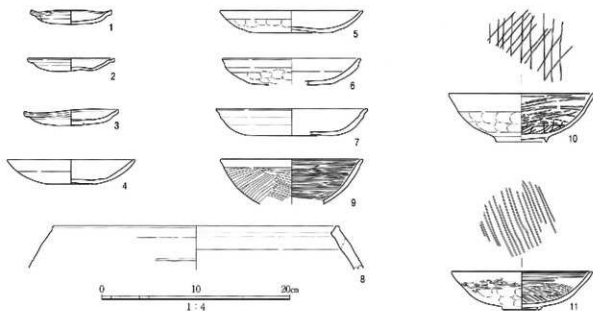


図5 NR301(第6層)出土遺物実測図

目の幅は4.5m、深さ約0.5mである。中央以北は、底が5cmほど浅く凹むが、溝底全体の高さは南北でほとんど変わらない。走向は座標北に対し、約 $6\sim 8^\circ$ 西に振る。

SD302の埋土はa～fの6層に分けられる。a～c層はいずれも細粒砂質シルトを主体とする作土層で、層厚も同じ約15cmである。a・b層のそれぞれの下面では鋤溝を検出し、溝の埋没過程で耕化していたことがわかる(図版2中)。鋤溝は幅約10cm、深さ約5cmである。遺物はいずれも瓦器の細片など中世の遺物を含み、時期が判明するものでは、a層から15世紀代の瓦質土器鉢鉢17、c層から12世紀末～13世紀初頭ごろの東播系須恵器のこね鉢16が出土した。d層は粗粒砂を主体とする水成層で、層厚は最大15cmである。12世紀後半～13世紀前半の瓦器皿19が出土した。e層は灰色シルトからなる水成層で、SD302が滞水状況にあったことを示す。層厚は最大15cmである。本層からは土師器皿12・14、土師器羽釜15、瓦器碗18などが出土した。瓦器碗18は12世紀後半～13世紀前半のものであり、溝は概ねこの時期に機能したものと考えられる。f層は粗粒砂と細粒砂を互層とする水成層で、層厚は最大15cmである。土師器皿13が出土した。

SD303・304(図6・7) 調査区中央西寄りで検出された南北方向の溝で、SD304はSD303が再掘削されたものである。走向は座標北に対し、およそ 5° 東に振る。SD303は幅4.2m以上、深さ0.8mで、埋土は大きく2層に分かれ、a層がシルト、b層が細礫～粗粒砂を挟在するシルトからなる水成層である。SD304は幅3.0m、深さ0.9mで、埋土はa層がシルト、b層が粗粒砂を挟在するシルトからなる水成層である。ともに下部は滞水状態を示し、土師器・瓦器・瓦などが出土した。SD304からは12世紀代に位置づけられる東播系須恵器碗20が出土したが、下位の第5層が13世紀以降であることから、それ以降に位置づけられる。

出土遺物(図7、図版5) 12～14は土師器皿である。12は口径10.6cm、13は平底で、口径10.2cm、14は浅い皿に高台がつき、口径10.1cmである。ともに最終調整はヨコナデである。15は土師器羽釜で、

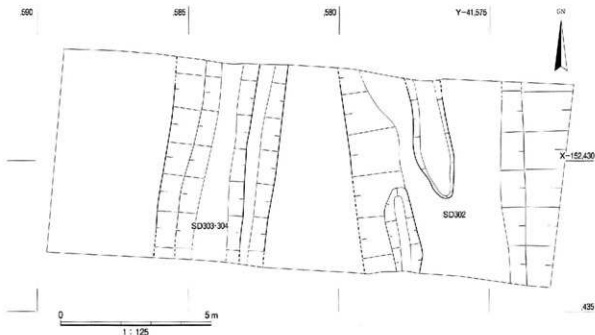


図6 SD302～304平面図

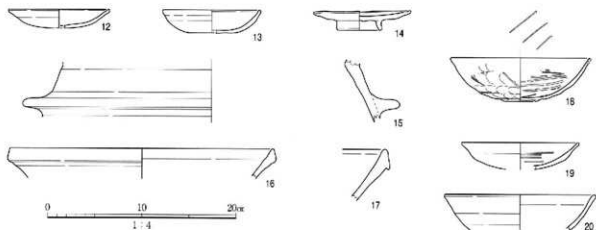


図7 SD302・304出土遺物実測図

SD302a層(17)、e層(16)、d層(15)、e層(12・14・15・18)、f層(13)、SD304(20)

外反する口縁部端部の大半を欠く。鈎径は40.0cmで、内外面ともヨコナデで調整する。16は東播系須恵器のこね鉢で、口径27.8cmである。17は瓦質土器描鉢で、口縁部下端を下方に突出させる。18は和泉型の瓦器碗である。口径14.7cm、高さ4.6cmで、高台は低い。底部内面に疎らな平行線の暗文を描き、ヘラミガキで調整する。外面は下半部に指頭圧痕が顕著である。19は瓦器皿である。口径12.2cmで、炭素は吸着していない。20は東播系須恵器碗で、口径15.6cmである。内外面とも回転ナデで仕上げ、外面の口縁部に重ね焼痕がある。以上の土器は時間幅があり、12～14は11世紀代、20は12世紀代、18・19は12世紀後半～13世紀前半、16は12世紀末～13世紀初め、13世紀中頃～14世紀前半、17は15世紀に概ね位置づけられる。

2) 中世末～近世初頭の遺構と遺物

調査区西部で同じ位置に繰返し掘削された、環濠と考えられる南北溝SD201～203を検出した(図4・8・9、図版3・6)

SD201 上位の遺構によって、上部を欠失しているが、幅6.0m以上、深さ1.2mの溝である。走向は座標北に対し、およそ6°西に振る。埋土は大きくa～c層に分かれ、a層はシルト偽礫を多量に含む細粒砂質シルト、b層は細粒砂質シルト、c層は掘削時のシルト偽礫を含む細粒砂質シルトからなる。b層は自然堆積、a層は人為的な埋戻しによる。a層には下位層に由来する偽礫を多く含むことから、SD201の東層に土塁の存在を想定させる。b層から白磁皿21・青花碗22・青花皿23が出土した。最も新しい22はおおよそ豊臣期のもので、埋没時期はそれ以降と考えられる。

SD202 SD201の再掘削で、上位のSD203に大半が削平される。また、西層はSD205に切られるが、幅はおおよそ8.0m、深さ1.0mの規模に復元される。埋土は大きく2層に分かれ、a層が細粒砂、b層が粗粒砂質シルトを主体とする自然堆積層である。顕著な遺物は確認できなかった。

SD203 最後の環濠で、西層をSD204に切られるが、幅はおおよそ8.0mに復元できる。深さ1.5mで、埋土は概ねa～dの4層に分かれる。a・b層はシルト偽礫を多量に含む細粒砂質シルトからなり、人為的な埋戻しによるもので、東層に土塁の存在を想定させる。c層は細粒砂質シルトからなる自然

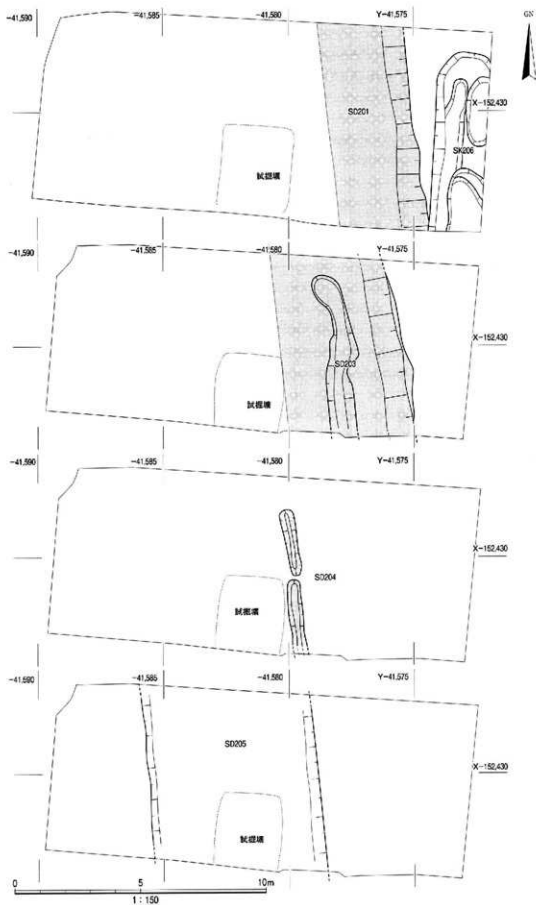


図8 中世末～近世初頭の溝の変遷

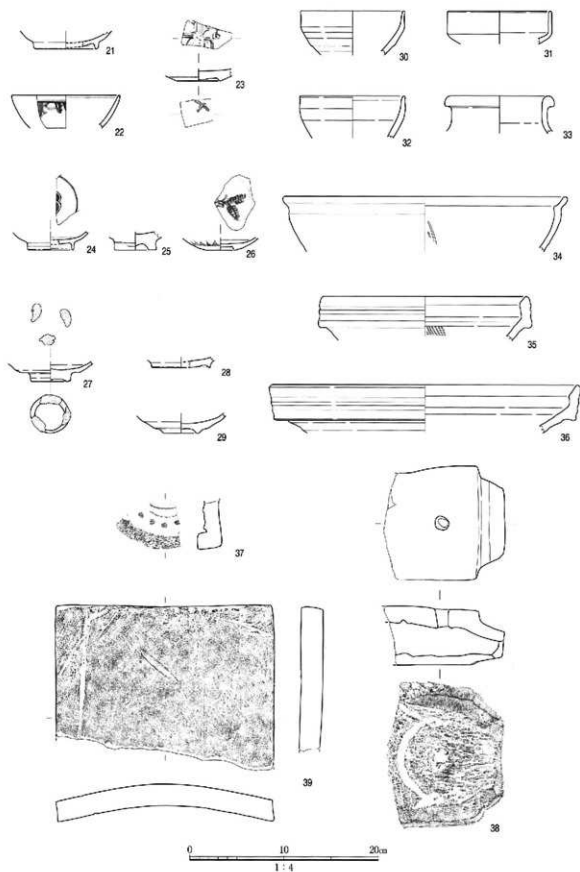


図9 中世末～近世初頭の出土遺物実測図

SD201b層(21～23)、SD203a層(29)、b層(24～28・34)、c層(30・32・35・36)、d層(33・37～39)、SD204(31)

堆積層である。d層は粗粒砂を挟むシルトからなる水成層で、滞水状況を示す。以上の埋土からは、豊臣期～徳川初期の青花・国産陶磁器・瓦などが出土した。豊臣期までの遺物が多いが、b層からは徳川初期以降の肥前陶器皿27、瀬戸美濃焼灰釉皿28、a層からは肥前陶器皿29が出土しており、最終的な埋没時期は17世紀中頃以降と考えられる。

SD204 SD203の埋没後に掘削された幅が狭く深い溝で、上端をSD205に切られるが、概ね幅1.7m、深さ1.4mに復元される。長さは5.5m以上で、途中で切れる。埋土は大きく3層に分かれ、a層はシルト偽礫を多く含む細粒砂質シルト、b層は粗粒砂を挟むシルト、c層はシルトである。遺物は肥前陶器碗31が出土した。

SD205 調査区中央で検出された南北溝で、幅9.0m以上、深さ0.9mである。埋土は大きく2層に分かれ、a層は東層近くにシルト偽礫を多く含む細粒砂質シルトの埋戻し土である。b層は中粒砂質シルトからなる作土層で、下面に耕作痕跡がある。下位層に由来する遺物以外、確認できなかった。

SK206 調査区東端で検出された土壌である。長さ7.0m以上で、幅は3.0mに復元できる。深さは最大0.7mで、埋土は大きく3層に分かれ、a層はシルト偽礫を含む細粒砂質シルトからなる埋戻し土、b層は粗粒砂、c層はシルトからなる自然堆積層である。掘形内の3箇所に凹みがある。瓦器・青花・肥前陶器の小片が出土し、豊臣期以降に位置づけられる。

出土遺物(図9、図版6) 21は白磁皿である。高台径は6.4cmで、畳付に砂が付着する。22は青花碗で、口径11.3cmである。外面に呉須で文様を描く。23は青花皿の底部である。萁筒底で、底部内面に「寿」とみられる文様化した吉祥文字、底部に「×」を描く。24は青花碗である。高台径は4.7cmで、畳付は釉をはぎ取る。内面に合子錦文を呉須で描く。25は肥前陶器碗で、高台径は4.4cmである。26は青花皿である。萁筒底で、畳付以外は施釉し、底部内面には花鳥とねじ花、外面には芭蕉葉文を描く。27は肥前陶器皿で、高台径は4.1cmである。内面、畳付の3箇所に砂目跡がある。28は瀬戸美濃焼灰釉皿で、高台径は6.0cmである。29は肥前陶器皿で、高台径3.9cmである。30は瀬戸美濃焼天目碗で、口径10.8cmである。鉄釉を厚く塗り、下端に釉溜まりがある。31は肥前陶器の腰折碗で、口径10.7cmである。32は瀬戸美濃焼天目碗で、口径10.8cmである。33は肥前陶器三耳壺の口縁部で、口径10.2cmである。外面は葉灰釉、内面は鉄釉を施す。34は瓦質土器播鉢で、口縁端部を外反させ、口径29.6cmである。35・36は備前焼播鉢である。口径はそれぞれ21.4cm、32.3cmである。以上の遺物は16世紀前半から17世紀中頃までの幅がある。概ね21・23・26・35・36は豊臣期より古く、22・24・25・30・32～34は豊臣期、27・28・29・31は徳川初期から17世紀中頃の資料に位置づけられる。37は巴文軒丸瓦である。復元直径16cm、瓦当、周縁部の厚さは、1.5cm、2.6cmである。珠文を密に配す。被熱している。38は丸瓦で、最大幅12.2cmである。内面に吊り紐痕がある。39は平瓦で、最大幅23.3cmである。側面は直に面取りし、凸面に凹面台の圧痕が残る。以上の瓦は室町後期のものだろう。

3) 近世後期以降の遺構と遺物

調査区西部の第3層上面で、溝あるいは落込みとなるSD101～103を検出した(図10、図版4)。

SD101 幅11m以上で西方に延び、深さは0.6mである。埋土は2層に明確に分かれ、上部は層厚

50cmで、廃棄物を多く含む中粒砂からなる埋戻し土である。下部は層厚10cmで、中粒砂質シルトからなる作土層である。下面に南北方向の耕作痕が見られた。18世紀後半以降の肥前磁器を含む。

SD102 西肩をSD103に切られるが、幅3.6mに復元できる溝である。深さは0.9mである。埋土は2層に明確に分かれる。上部は層厚30cmで、シルト質中粒砂、下部は廃棄物を多く含む締まりのない

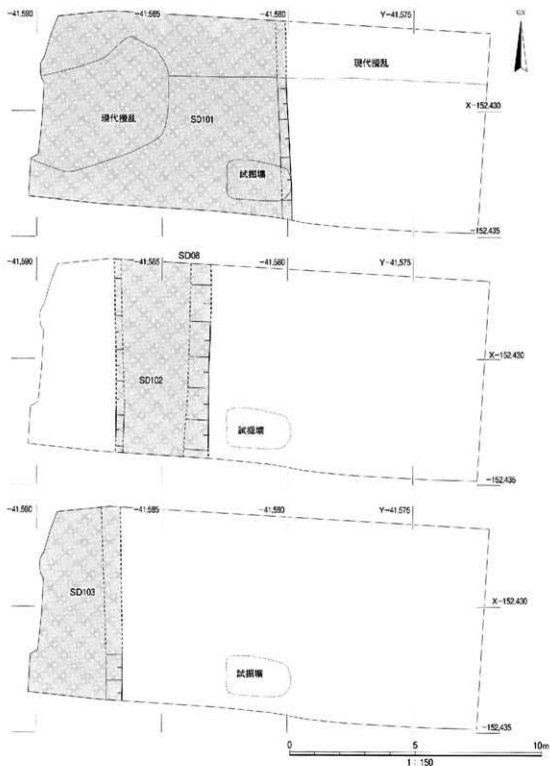


図10 近世後期以降の遺構の変遷

中粒砂からなる埋戻し土である。18世紀後半以降の肥前磁器を含む。

SD103 幅4 m以上で西方に伸び、深さは0.5mである。埋土は2層に明確に分かれ、上部は層厚30cmで、人頭大のシルト偽礫を多く含む中粒砂質シルトからなる埋戻し土である。下部は層厚20cmで、中粒砂質シルトからなる作土層である。下面に南北方向の耕作痕が見られた。19世紀以降の肥前磁器を含む。

第Ⅲ章 まとめ

今回の調査では中世の大規模な溝、中世末から近世初頭の環濠を検出した。調査の成果は次のとおりである。

1) 中世の溝について

SD302とSD303(304)の2条の溝が発見された。SD302はおよそ幅10m、深さ2mに復元できる大規模な溝で、概ね13世紀代に位置づけられる。座標北に対して、約6～8°西に振り、平野郷の中心で行われたHN85-23次調査で発見された13世紀の溝・道路と同様の方向をもつ。ここでは同じ位置に溝が連続して掘られており、長期にわたって町割の基準となるラインがこの段階に存在したことが予想されている。今回のSD302は埋没段階で耕作地となったものの、その後は同じ位置に環濠が築かれた。環濠の東端の掘削にあたって、SD302のラインが一つの基準として認識されていた可能性がある。

SD303はSD302よりもやや小規模ながら、溝底の高さは同じで、出土遺物の点からも、ほぼ同時期に機能していた可能性が高い。座標北に対して、約5°東に振る方向は、偶然の一致かも知れないが、16世紀後半以降には確認される環濠内の町割とはほぼ一致している。

2) 環濠について

SD201は幅6.0m以上、深さ1.2mあり、その位置と規模から、平野郷を囲む環濠と考えられる。環濠は少なくともSD202・203と2度にわたり再掘削され、また、意図的な埋戻しも少なくとも2度行われている。SD201からは豊臣期以前の16世紀代の遺物が出土しており、現在想定されている16世紀中葉から後半の環濠の掘削時期とも整合的であるが、出土資料が乏しく、時期の詰めは難しい。

また、SD203からは豊臣期を中心に17世紀中頃までの遺物が出土した。それ以降の新しい遺物は見当たらず、17世紀代に埋戻しが行われた可能性は高いものの、その後、滞水している溝は小規模なSD204以外はなく、そのほかの凹みは耕作地として利用されたSD205、SD101～103だけである。『摂州平野大絵図』1763(宝暦13)年に記載された環濠のこの地における所在、有無、実態について、新たな課題が生じることとなった。

本調査では、平野環濠都市の成立に関わり、環濠の掘削時期や埋没の変遷に関する情報を得ることができた。また、これまで調査があまり及んでいなかった東端地域の中世から近世の状況が明らかになった。未解決な問題、新たに生じた課題もあるが、今後の調査の進展によって、徐々に解明されるものと期待される。

引用・参考文献

- 伊野近富1995、「土師器Ⅲ」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp. 225-244
- 大阪都市協会1983、「大阪人」4月号
- 大阪市文化財協会1985、『宮城氏による敷地造成に伴う平野環濠跡発掘調査(HN85-23)略報』
- 1999、『大阪市瀬底文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.49-72
- 2009、『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』
- 2010、『平野区平野市町三丁目(もと平野青少年会館用地)における平野環濠都市遺跡試掘調査(HN09-3)報告書』
- 大庭重信2005、「平野出土の銅鐸」：『平野区誌』平野区誌刊行委員会、pp.32-34
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「瓦器Ⅲ」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp. 315-337
- 小山正忠・竹原秀雄1970、『新版 標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 新修大阪市史編纂委員会1990、『新修大阪市史』第4巻、pp.378-382
- 文化庁文化財部記念物課編2010、「第1節 遺跡における土層の認識」：『発掘調査のてびき-集落遺跡発掘編-』、pp.94-115
- 前田豊邦1992、「三上家文書にみえる銅鐸について」：『大阪の歴史』35号、pp.121-126
- 豆谷浩之1999、「平野環濠都市遺跡における地割の転換をめぐって」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp. 355-363
- 森 毅1992、「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp. 358-372
- 2005、「平野環濠都市遺跡の成立」：『平野区誌』平野区誌刊行委員会、pp.82-83

**The Excavation Report
of
the Hirano Moated Town Site
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association

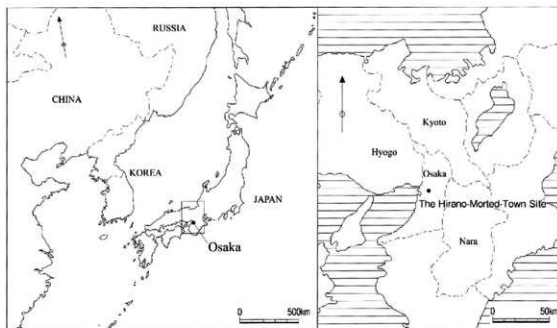
CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Background and progress of research	1
1) Basic information on the site	1
2) Background and progress of the research	3
3) Process of making report.....	4
Chapter II Investigation results	5
1 Stratigraphy	5
2 Features and artifacts	7
1) From the late Ancient to the late Medieval Period.....	7
2) From the final Medieval to the early Edo Period.....	9
3) From the late Edo Period.....	12
Chapter III Conclusion	15
1) On the medieval ditches	15
2) On the moat.....	15
References and bibliography	16

English contents



報告書抄錄

ふりがな	ひらのかんごうとしいせきはつくつちようさほうこく							
書名	平野環濠都市遺跡発掘調査報告							
編著者名	岡村勝行							
編集機関	財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひらのかんごう 平野環濠 都市遺跡	ひらのかんごう 大阪市平野区 平野市町	27126	-	34° 37' 19"	135° 33' 26"	20100826~ 20101005	200㎡	遺跡内容の 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
平野環濠 都市遺跡	集落跡	中世		溝		土器・瓦		
		近世		環濠		陶磁器・土器・瓦		

本書は平野環濠都市遺跡の東端で行った調査報告である。旧地割に関わる可能性のある大規模な中世の南北溝を検出した。また、環濠と考えられる中世末に掘削された南北溝を検出し、近世初頭まで何度も掘削と埋戻しを重ねている状況が明らかになった。

平野環濠都市の成立に関わり、環濠の掘削時期や埋没の変遷に関する情報を得るとともに、これまで調査があまり及んでいなかった東端地域の中世から近世の状況が明らかになった。

圖 版

調査地近景
(南東から)



南壁断面
(北東から)



NR301・SD302・
303検出状況(北から)





SD302・303検出状況
(南から)



SD302b層下面
検出鋤溝(北から)



SK206検出状況(南か
ら)

SD202～205断面
(南から)



SD201検出状況
(南から)



第5層上面の状況
(東から)

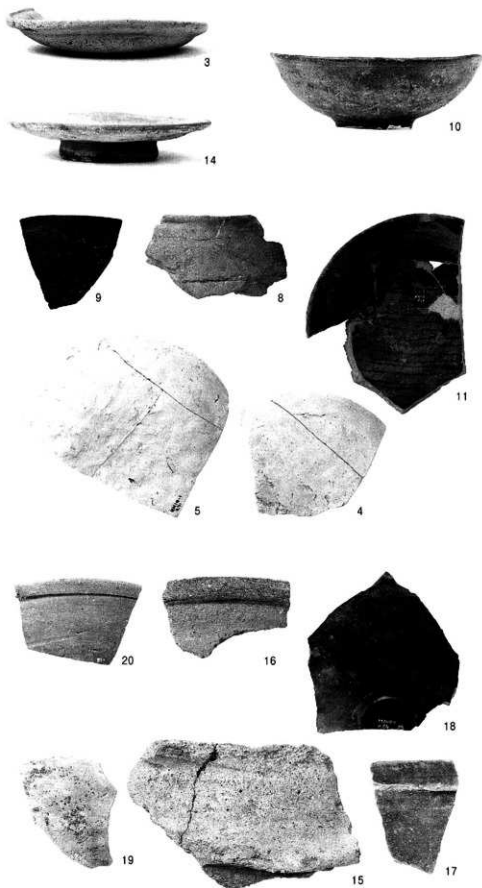




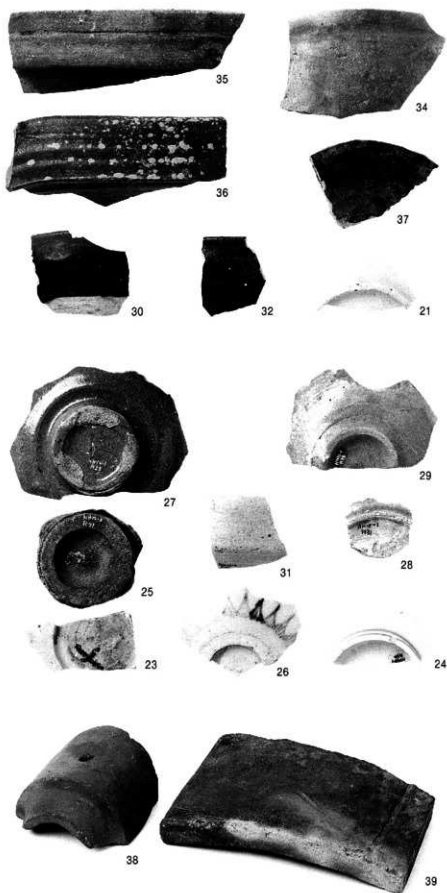
SD101~103検出状況
(北東から)



第3層上面の状況(東から)



NR301: 第6層(3・5・8~11)、SD302(14~19)、SD304(20)



大阪市平野区 平野環濠都市遺跡発掘調査報告

ISBN 978-4-86305-076-1

2012年3月30日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2-6-8

**The Excavation Report
of
the Hirano Moated Town Site
in Osaka, Japan**

March 2012

Osaka City Museum Organization
Osaka City Cultural Properties Association